久留米大学文学部紀要
国際文化学科編第3号（1993）

長篇小説『無冕皇帝』とその作者をめぐる紛争について

与小田隆一

On the Contention about Xiao Lijun's Novel 'Wumian Huangdi' ('The Uncrowned King')

Ryuichi YOKOTA

【要約】

(1) 創作の自由が保証され，政治による干渉が最大限に緩和された中で出現した長篇小説『無冕皇帝』は，初めて文学界自身を批判の対象とし，拝金主義，道徳観念，法観念の欠如など文学界内部に現実に存在する問題を指摘した文学作品として意義を持つ．

(2) 作者蕭立軍に対し，中国作家協会は，極めて短期間のうちに，停職検査処分という「文学作品について政治的責任を問わない」との原則に反した，極めて異例の厳しい政治的処分を下した．そこには，中国作家協会の組織としての意図が働いていた．

(3) この作品の出現，及びそれによって引き起こされた紛争は，現在の中国の文学が抱えている次のような二つの問題の存在を明らかにした．

a．創作の自由，政治による干渉の排除ということが，そのまま直ちに文学の繁栄にはつながっていないこと．

b．現在の中国の作家は，作家という「個人」としての立場と，作家協会会員という「組織の一員」としての立場との矛盾という問題を抱えており，これが創作活動に制約を加える要因ともなり得ること．

【キーワード】『無冕皇帝』，蕭立軍，梁暁声，中国作家協会，創作の自由

（1）

長篇小説『無冕皇帝』（『無冠の皇帝』）は，蕭立軍という作家としては殆ど無名に近い人物によって書かれ，上海で発行されている「電視・電影・文学」(1)という，これもまた文芸雑誌としては殆ど無名に近い雑誌に掲載された作品である．

それにも関わらず，この作品の出現は，中国の文学界内部に異例の激しい紛争を引き起こした．このことはまた，この作品が重大な問題を含んだものであることの一つの証明とも言えよう．

この作品は，どのような背景の中で生み出され，どのような意義を持つものなのか，また，この作品の出現により引き起こされた紛争は，何を意味するものなのか．本論では，主にこの二点について探っていくこととする．

まず，作者である蕭立軍の経歴(2)，及び作品の内容について触れておきたい．

蕭立軍は，1949年，新中国建国前後の時期に東北地方に生まれたと思われる．文化大革命期に天津の南開大学中文系を卒業し，その後河北省石家荘市近郊の農村に送られ，労働に従事している．

文化大革命終結後は，文芸理論雑誌「文芸研究」（北京，文化芸術出版社）の編集部に勤務していたが，その際編集者としての手腕を同誌編集長であり，著名な作家でもある馮牧に認められ，1985年２月馮牧が雑誌「中国作家」（北京，作家出版社）編集長に就任した際，行動を共にし，同誌副編集長に就任した．

'85年，「中国作家」編集部に移ってまだ間もない時期に，蕭立軍は，作家梁暁声(3)の長篇小説『雪城』の原稿をめぐる争奪戦に参加することになった．この際の詳細な経緯は不明であるが，有力な文芸雑誌「十月」を発行する北京の「十月」文芸雑誌社，作家出版社など数社がこの作品の出版権を争った結果，最終的に「十月」文芸雑誌社が出版権を獲得し，まず，雑誌「十月」の'86年第２期，第３期に連載した後，'88年11月には上・下二冊の単行本という形で出版している．

梁暁声は，蕭立軍にとっては，古い友人の一人であり，梁暁声の小説『這是一片神奇的土地』など数篇の作品が映画化される際にも，そのシナリオ執筆は，蕭立軍が担当している．それにも関わらず，蕭立軍は，この親しい友人の作品の出版権を獲得することが出来なかったのである．

『雪城』の争奪戦に敗れた後，蕭立軍は，この時の経験をもとに小説としては処女作にあたる『無冕皇帝』を執筆した．作品完成後，他誌編集者との接触の機会も多い蕭立軍は，ひそかに発表の機会をうかがっていたようで，'86年12月，上海に出張し，雑誌「電視・電影・文学」の編集者と他の用件で会った際に，『無冕皇帝』の原稿を手渡している．

これに対し，「電視・電影・文学」編集部では，作者に内容の一部修正を求めた上で，同誌への掲載を決定した．翌'87年２月に蕭立軍は，第二稿を提出したが，当時は所謂「ブルジョア自由化反対」のスローガンが叫ばれ，作家・劉賓雁や，評論家・王若望らが共産党から除名されるなど，文学に対する政治的引き締めが強化されていた時期でもあったため，「電視・電影・文学」編集部では，当分の間掲載を見合わせることとし，結果的には翌'88年５月発行の同誌第３期に掲載されることになった．

次に，作品の内容についてであるが，図１に示す各出版社名，雑誌名，人名には，それぞれ特定のモデルが存在すると思われる．

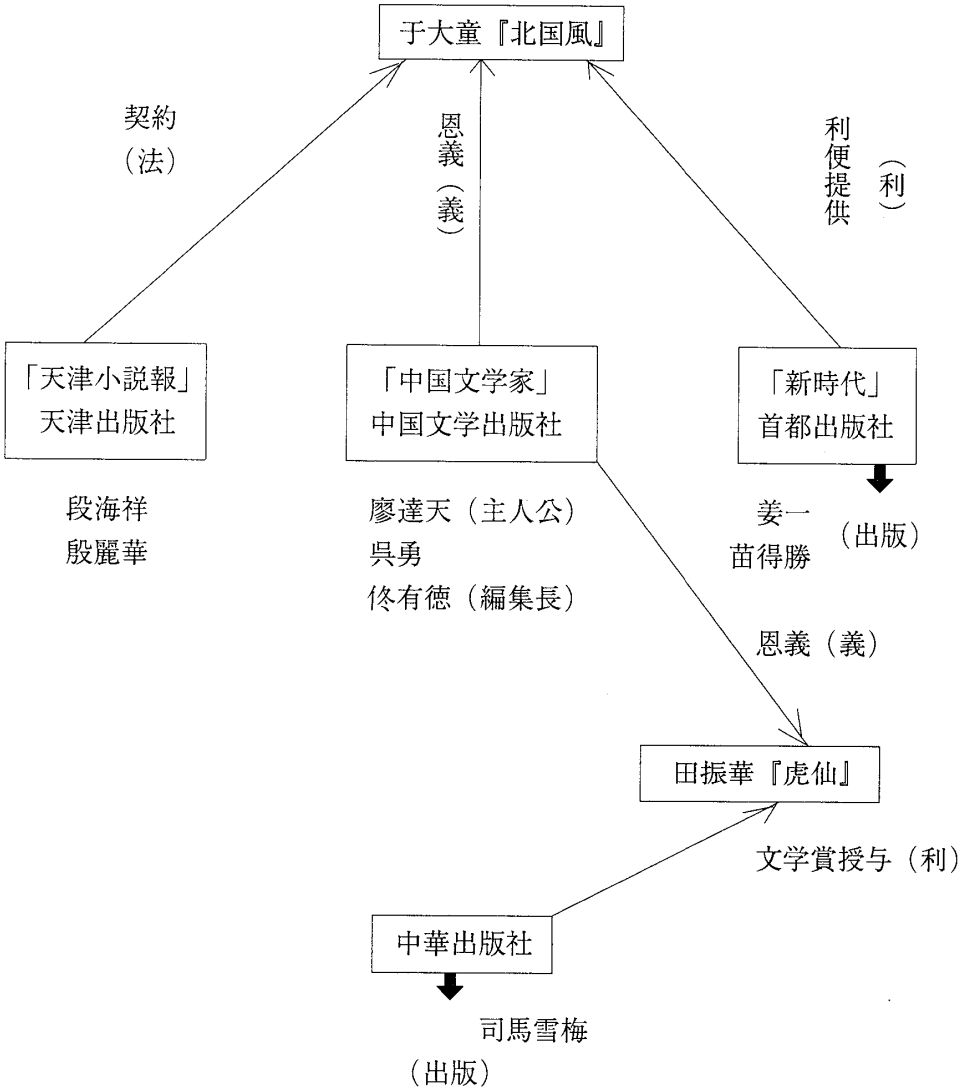
この特定のモデルの存在という問題について，蕭立軍は，作品の序文で次のように述べている．

> 作者には，フィクションを作り上げて，人を困惑させたり，嘆かせたり，溜息をつかせたりしようという意図はない．もし，読者が，作品中の人物や出来事が，自分の知っているある種の現実に驚くほど似ていることを発見したとしても，それに対しては，決して偶然ではない，としか言いようがない……(4)

このように，作者自身も序文の中で，作品中の人物や，ストーリーに特定のモデルが存在することを暗示しており，これがこの作品をめぐる紛争の大きな原因となった．

図１に示したように，雑誌「中国文学家」の編集者である廖達天が，同僚の呉勇とともに于大童の『北国風』及び田振華の『虎仙』という二篇の小説の掲載，出版権をめぐって，他の出版社との間に繰り広げる激しい争いが，この作品の最も主要な内容を成している．

田振華の『虎仙』については，本来廖達天と作者との間に，「中国文学家」に掲載する



（図１）

という約束がなされていた．以前，田振華の作品が批判を浴びた際，「文学研究」という権威ある文芸理論雑誌の編集者だった廖達天は，すぐに自らの手による批判への反論をたてつづけに「文学研究」に掲載することにより，田振華への批判を退けたという経緯があった．このことに大きな恩義を感じていた田振華は，恩人廖達天の編集する「中国文学家」に作品を掲載することを当然の如く快諾したのである．

ところが，その後中華出版社が強引に両者の間に割り込んで来る．5000元という高額の賞金が授与される「中華文学賞」を企画していた中華出版社は，『虎仙』の出版権と引き換えに，この文学賞を無条件で田振華に授与することを申し出たのである．

結局，恩義のある廖達天を裏切ることには後ろめたさを感じながらも，文学賞の誘惑に

も勝てなかった田振華は，廖達天には，中華出版社に原稿を強奪されたと嘘をつき，陰では，秘かに中華出版社に原稿を渡してしまう．廖達天の田振華との個人的な信頼関係は，大金の前にいとも簡単に敗れ去ってしまう．言わば，「義」が「利」に敗れたのである．

一方，于大童の『北国風』については，当初天津出版社が雑誌「天津小説報」に掲載するという契約を作者との間に交わしていた．しかし，旧友の廖達天に対しても，かつて無名だった自分を売り出してくれたという恩義を感じる于大童は，廖達天に編集者としての功績を上げさせるため，自ら積極的に天津出版社との契約を無視して，廖達天の「中国文学家」に掲載，出版権を与えることを約束してしまう．更には，その後そこに首都出版社の雑誌「新時代」も加わり，三社の間で争奪戦が起こる．

激しい争いの末，于大童の愛人の妊娠中絶のために便宜をはかることを申し出た首都出版社が原稿を入手することになる．

ここでも，首都出版社による便宜提供という「利」が，廖達天と于大童との約束という「義」のみならず，本来最優先されるべきであるはずの天津出版社との契約という「法」をも凌駕することになる．

友人として信頼関係で結ばれていたはずの田振華と于大童に，ともに裏切られる形となり，激怒した廖達天は，編集長佟有徳らの強い反対にもかかわらず，言わばもう一人の敗者である天津出版社と手を結び，于大童に報復することを計画する．廖達天は，争奪戦の過程で既に「中国文学家」編集部の手に渡っていた『北国風』の原稿のコピーを天津出版社に渡し，首都出版社に対抗して出版させようとしたのである．そして，廖達天が処分を覚悟の上で，編集長の机から『北国風』のコピーを盗み出す所で，作品は結末を迎える．

この作品は，文学的に質が高く，なおかつ売れ行きも見込まれる貴重な原稿を手に入れるためには，手段を選ばぬ出版社の強引なやり方，また，金や便宜といった「利」のみを追求し，自らが積極的に交わした友人との約束という「義」や，本来最も強い拘束力を持つはずの契約という「法」をも無視してしまう作家の堕落ぶりを描いている．

文化大革命終結後，特に'78年に出現した文化大革命の被害を描く「傷痕文学」以来，中国の文学界は，一貫して社会の中に存在する様々な問題を指摘し，批判するという役割を演じていた．この『無冕皇帝』の中に描かれた拝金主義や，道徳観念，法観念の欠如という問題についても，既に多くの文学作品が題材として取り上げていた．

しかしながら，文学界はあくまでも批判する側なのであり，決して批判の矛先が自らに向けられることはなかった．文学界自体が，批判の対象の外にある一つの聖域なのであり，一般社会に対して，あたかも作品の題名である「無冠の皇帝」のような立場に立っていたということも出来よう．この作品の題名には，そのような皮肉の意味がこめられているものと思われる．

（2）

それでは，文学界に対する文学作品という形での初めての内部告発とも言うべきこの『無冕皇帝』が現われた背景に，どのような状況が存在していたのであろうか．それは，主に次の二点に集約することが出来よう．

まず第一に，新中国建国以来，時期による強弱の差こそあれ，常に存在していた文学に

対する政治的干渉が殆どなくなり，政治への従属から解放された文学が，かつてない程の自由を享受していたこと．そして，第二に，その反面，経済開放政策の進展に伴う社会の変化により，文学が今度は言わば経済への従属を余儀なくされるという，これもまたかつてない状況に直面していたことである．

第一の点については，'84年末から'85年末にかけて開催された中国作家協会第4回大会がその直接的な契機となった．当時の共産党中央書記局書記・胡啓立は，大会の席上，共産党，すなわち「政治」の側を代表して祝辞を述べ，従来共産党の文学に対する干渉があまりに多すぎたことを反省し，創作の自由を保証した上で，更に次のように述べた．

> 文学創作の中に現われた誤りや問題は，法律に違反するものでない限り，全て文芸評論，すなわち批評，討論，論争のみを通して解決することが可能なのであり，批評を受けた作家が，政治的差別を受けたり，作品が原因で処分や，その他組織的な懲罰を受けることがないよう，必ず保証しなければならない(5)．

このように，胡啓立は，過去にしばしば見られたような，文学作品に対する批判が，作者自身への政治的批判，更には政治的処分にまで発展するという状況が，二度と出現しないよう厳しく戒めている．

これを受けて，著名な作家であり，中国作家協会副主席でもある王蒙は，「文学」の側を代表して閉幕の辞を述べ，「中国文学の黄金時代が本当にやって来た．」(6)という感慨を洩らした．

これ以後，文学界には，正に王蒙が「黄金時代」と形容するような活況が現われた．文学作品は，題材の面のみならず，手法の面でも新しい試みを行ない，また数多くの若い作家が出現した．

しかし，文学上の新たな試みがほぼ出尽くしてしまい，その中心的な担い手である多くの若い作家が創作上の行きづまりを見せ始めた'87年ごろから，その「黄金時代」にもかげりが見え始める．'88年初頭の「文芸報」社説は，前年の文学界の状況を次のように総括している．

> 1987年の文学創作は，数の上では少ないとは言えず，長篇小説だけでも二百篇前後ある．その中には，優秀な作品も若干あるが，過去に比べれば，我々の文学が到達したレベルはと言えば，質的には明らかに平凡で，特に人の心を揺り動かすような，また大きな影響力を持つような力作に欠けていた(7)．

このような傾向は，『無冕皇帝』の出現した'88年に入ると，ますます顕著なものとなっていった．

第二の点についても，それが問題として現われ始めたのは，ほぼ第一の点と同時期の'84年の末である．従来，中国の出版事業は，殆ど国家によって運営され，損失を出した場合には，国家がそれを補填するという形がとられていた．ところが，経済体制改革の進展に伴い，他の多くの国営企業と同様，出版社も独立採算制への移行を迫られることになった．

’84年12月，国務院は，「定期刊行物出版社の損失自己負担実施に関する通知」を発令し，’85年１月１日以降，条件の整った出版社については，国家による赤字の補填を中止することを宣言し，その他の出版社についても，暫時赤字補填は継続するが，早期に独立採用制に移行するために，赤字を減らすための経営努力を強く要求した(8).

このため，従来採算をある程度度外視することの出来た出版社も，これ以後は，出版物の内容や質よりも，むしろ利益を上げることを最重要視せざるを得なくなった．そして，多くの出版社，特に無名の，中小出版社は，専ら売れる作品，すなわち恋愛小説，探偵小説，武侠小説，更には黄色（ポルノ）小説という本来非合法であるはずの出版物さえ出版するようになり，’88年になると，それらが文学関係の出版物のうち，かなりの部分を占拠してしまい，それに対する危機感を表明する意見も現われはじめた．次に引用するのは，その一例である．

> 文学図書市場では，いつもたて続けにブームが起きている．武侠小説ブーム，（台湾の人気女流作家）琼瑶ブームが起こった後，現在は，少なくとも街頭の露天の書店には，外国の色情的な内容を持つ小説が溢れている．まだ，色情ブームとまでは言えないが，それでも社会各界の様々な論議を引き起こしている(9).

一方，『無冕皇帝』に登場する中国文学出版社のように，従来から文学的にも質の高い作品を出版して来た出版社や，主に専門書，学術書を出版して来た大出版社は，単に利潤のみを追求する訳にもいかず，「社会効益」，すなわち出版物の質と，「経済効益」，すなわち利潤の両立を謀らなければならないという苦しい立場に立たされることになった．この問題について，’88年初頭の「文学報」論評は，次のように述べている．

> 現在の出版物は，まず社会効益を重視しなければならず，その上にまた経済効益をもあわせて考慮しなければならない．しかし，編集，出版，印刷，発行の各部門は，それぞれに困難を抱えている…
>
> 北京，上海の数社の大出版社から伝え聞くところによれば，経営はどこでも非常に苦しいということである．利益を上げることの出来る書物が少なくなる一方なのに対し，損失を出す書物は多くなる一方で，多くの価値のある書物が，損失を出す恐れがあるために，棚上げにされ，印刷されないままになってしまっている(10).

これに加えて，’87年ごろから始まった紙価の高騰が’88年に入ると一層激しくなり，これもまた出版社の経営を圧迫する一因となった．

’88年３月，「文芸報」編集部は，この問題に関する調査報告を掲載し，その中で次のように記している．

> 中華書局，三聯書店，作家出版社の報告によれば，紙価は十年間連続で上昇した後，最近では糸の切れた凧のように，完全に歯止めを失ってしまっている．
>
> ……各出版社は，書物の出版を確保するために，ただ市場のなりゆきにまかせ，紙販売業者による便乗値上げにも黙って従っている．これに加えて，印刷コストも急激

に上昇し，図書を出版しても殆ど利益の見込めない状況を作り出し，各大手出版社のもともと困難だった経済状態を更に，急激に悪化させている(11).

以上に述べて来たように，創作の自由が保証され，文学の「黄金時代」と形容された'85年当時と比べて，文学作品の質が相対的に低下していたこと，そして，出版社の経営が苦しくなっていたこと，主にこの二つの原因から，各出版社，特に著名な大出版社は，『無冕皇帝』に描かれたような文学作品の争奪戦への参加を余儀なくされてしまった.

すなわち，于大童の『北国風』や，田振華の『虎仙』のような文学的にも質が高く，なおかつかなりの売れ行きが期待出来る作品，換言すれば，「社会効益」と「経済効益」という二つの条件を同時に満たすことの出来る貴重な作品を，自社の命運を賭けて，他社と争うことになったのである.

そして，このような出版社間の激しい作品の争奪戦は，一部の作家と編集者との力関係にも大きな影響を及ぼすことになった．次に挙げるのは，「文学報」に掲載されたこの問題に関する論評の一部である.

> 現在，一部の作家にお仕えするのは，大変難かしい．彼等の作品は，まだ一度書いてしまえば，どんなことがあろうが全く手直しする必要がない，というレベルにまでは決して達してはいないのに，彼等は往々にして，編集者に「一字たりとも改めない」という約束を強いている．そして，もしそれが聞き入れられなければ，ただちにもっといい条件で買ってくれる他の雑誌を探すのである.
>
> 一部の作家の前では，編集者は，殆ど「奴隷」に成り下がり，一方作家は，編集者の「衣食の全ての面倒を見る父母」，あるいは，「無冠の皇帝」になっている．このような作家と編集者との関係には，本当に人心を寒からしめるものがある(12).

文学作品の質の低下，及び出版社の経営難という二つの原因によって引き起こされた作品の奪い合い，更には，一部の作家の堕落や「皇帝」のような傲慢な態度などの問題は，蕭立軍が『無冕皇帝』を執筆した'86年当時から既に存在していたようであるが，この作品が実際に発表された'88年は，正にそれらの問題が一層深刻化し，文学界内部でも問題として意識され始めた時期だったのである．本章で引用した「文芸報」，及び「文学報」の数篇の論評の存在は，そのことを如実に物語るものだということが出来よう.

(3)

第一章，第二章でふれて来たように，『無冕皇帝』は，文学作品という形での初めての文学界からの内部告発という性格を持つものであり，作品中に描かれた問題が正に深刻化し，問題として意識され始めた時期に発表されたものであった．そのため，発表直後から，文学界内部に激しい反応を引き起こすことになった.

作品発表後，一ヶ月もたたない'88年6月1日，中国作家協会書記局は，『無冕皇帝』に関する会議を開き，梁暁声をはじめ，自分が作中人物のモデルであると考える十数名の作家，雑誌編集者から提出され告訴状を検討した結果，作家・蕭立軍と掲載雑誌「電視・電

影・文学」の編集部に対し，何らかの制裁措置をとることを決定した(13).

告訴状を提出した十数人の人物のこの作品に対する批判とは，すなわち作品に描かれた作家・于大童が梁暁声を，その作品『北国風』が『雪城』を，更には主人公の廖達天が蕭立軍自身をそれぞれモデルとしたものであること，また，作品の内容も『雪城』をめぐる出版社間の争いをもとにしたものであり，その中で事実が著しく歪曲され，多くの作家や編集者に対して侮辱が加えられている，ということであった.

第一章で引用した蕭立軍自身による作品の序文でも，作中人物やストーリーに特定のモデルが存在することを暗に認めている．それに加えて，作者自身は，「長篇小説」というフィクションの形で発表しようとしていたにも関わらず，「電視・電影・文学」編集部がこれに独断で，ノンフィクションを意味する「紀実」の二字を追加し，「長篇紀実小説」として発表したことが，特定のモデルの存在を一層強調することになった.

当時は，実在の人物や，実際に起こった事件に基づき，一部フィクションの要素を加えたものとされる「紀実小説」が流行しており，編集部としては，読者の注目を引くためにこの「紀実」の二字を用いたものと思われるが，このことが問題を更に複雑なものにしてしまったのである.

6月4日には，『雪城』の出版元である「十月」文芸雑誌社が，北京で大規模な記者会見を開いた．これには，梁暁声をはじめ，作家協会幹部，「小説選刊」など有力な文芸雑誌の編集者らも多数出席し，『無冕皇帝』と作者・蕭立軍に対して激しい非難が浴びせられた.

梁暁声は，自分をモデルとした作中人物・于大童が愛人の妊娠中絶のために，恩義や契約を無視して，利便を提供してくれた出版社に原稿を渡す，というくだりを特に問題にし，これは，自分に対する言われのない中傷であり，名誉棄損にあたるとして，法庭への告訴さえほのめかした.

また，中国作家協会常務書記の鮑昌は，作品の内容には，ある程度真実をついた部分が存在することを認めながらも，同時に作者の文学に対する観念に誤りがある，すなわち文学作品を私憤を晴らす場にしている，という主旨の批判を行ない，その場で蕭立軍に対する停職，検査処分を，作家協会の組織の決定として宣言した.

作品発表後わずか一ヶ月しか経過しておらず，作品自体に関する論争も全く行なわれていないこの段階で，作者に対してこのような政治的処分が下されるのは，第2章に引用した，胡啓立の中国作家協会第4回大会に於ける祝辞に述べられた「作家が作品によって政治的処分を受けることがあってはならない」という文芸批評の原則に明らかに反するものであり，文化大革命終結後に於いては極めて異例の，厳しい措置であった.

6月16日には，「文学報」が，それまでの経過を文学関係の新聞，雑誌としては初めて報道し，ここでこの「無冕皇帝」をめぐる紛争が公けにされることになった.

その後，7月21日には，その「文学報」が鮑昌の要求に従い，彼自身による一文を掲載した．この中で鮑昌は，あらためて蕭立軍に対する批判を行ない，処分が既に正式に決定したことを明らかにした.

鮑昌は，またこの一文の中で次のようなことも述べている.

正直なところ，私は作家協会書記処に勤務して三年半になるが，文芸界の多くの不

和や紛争といった現象が，解決しようとすると，大変な困難を伴うものであることを痛感している．…一部の作家の間の紛争は，最も扱いにくいものであり，往々にして延々と何年も続き，多くの人々の時間とエネルギーをいたずらに奪い去ってしまう．だから，私は，小説によってプライバシーを暴露しあったり，それに尾ひれをつけて，互いに相手を戯画化しあうような情況が出現しないよう希望している(14)．

このように，言わば中国作家協会という組織を代表する人物である鮑昌は，『無冕皇帝』をあくまでも小説の形を借りた個人攻撃として処理してしまう．そして，この間，蕭立軍には，「個人攻撃ではなく，あくまでも文学界の問題点を指摘するために書いた作品である」(15)という主張が，伝聞という形でわずかに一度「文学報」の記事の中で簡単に紹介された以外には，公開の場で，自ら反論を述べる機会は全く与えられなかった．

しかし，その後8月，9月の二回に渉って雑誌「作品与争鳴」が『無冕皇帝』を転載し，あわせてこの作品に関する評論を掲載すると，それを契機に，主に同誌を舞台として，『無冕皇帝』に対する評価をめぐっての，雑誌という公開の場に於ける作品自体に対する論争がようやく開始された．

「作品与争鳴」は，その後も'88年11月，'89年2月，同年4月の三回，計五回に渉って，この作品に対する評論家や一般読者の意見を掲載，若しくは転載している．それらの中から特に代表的な意見をとり上げると，次のようになる．

（肯定論）

自由を最も多く，最も強烈に訴える文学家こそ，まず自分自身から自由を獲得しなければならない．私欲，すなわち名声や金銭の誘惑から解放され，凡俗な利害関係から解放されなければならない．

…『無冕皇帝』の文学に対する貢献とは，正に真に文学家自身の不自由さを描き出し，文学という聖地の上に存在する混乱した状況や，ごまかし，ほら吹きの横行，また，名声，地位，財産を得るために「人類の魂を作り出すエンジニア」という称号の下で行なわれる様々な芳しからざる取り引きや，文学自身の汚染が文学の発展にもたらす障害を描き出したところにある(15)．

（否定論）

文芸界の指導者たちは，作家協会大会の席上でも，また，大会後も，中国文学の黄金時代がやって来た，現在は建国以来最良の時期だ，と言っている．主流を成しているのは，あくまでも良いものであり，成果と欠点の比率は，九対一でしかない．何か良くないことがあれば，内部で言えばすむことであって，それを小説にして，外部の人々に混乱を見せることになれば，文芸界の素晴らしい情勢を損ってしまうことになる(16)．

また，これらの意見とは別に，鮑昌ら作家協会首脳部の蕭立軍に対する処分を批判する次のような意見も現われた．

観念の誤りに対しては，ただちに行政的手段や組織的処理に訴えるというのか．まして，単なる「文学観念の誤り」であって，政治観念の誤りではないのに．党の規約や法律，あるいは作家協会の会則にそのような規定があるというのか．

思想観念の問題は，ただ討論によってのみ解決が可能である．これは，（'78年の）党の第十一期三中全会以来，すでに一つの常識となっている．それなのに，今頃になって，突然また組織的な手段を用いて観念の問題を解決しようとするのは，以前の古いやり方に逆戻りすることではないのか(17)．

'89年4月，「作品与争鳴」が一般の読者の意見をまとめて掲載したのを最後に，この作品をめぐる論争には，一応の終止符が打たれた．しかしながら，論争の焦点は，文学界の内幕を文学作品という形で暴露したことの是非ということに集中し，これを契機に，作品に描かれた問題それ自体について本格的に議論が展開されることはなかった．

その後，梁暁声は，'90年初頭に長篇の自伝小説『龍年：一九八八』(18)を表し，その中で『無冕皇帝』とう作品がいかに自分をひどく傷つけたかを改めて述べた．一方，蕭立軍も，新聞，雑誌などの言わば公開の場での発言は行なっていないものの，その後もこの作品に対する梁暁声や，作家協会首脳部の態度に強い不満を洩らし続けているといわれ(19)，'92年夏の段階に至ってもなお，はっきりとした決着はついていないようである．

更にもう一つ指摘しておかなければならないのは，この作品をめぐる論争は，その殆どが「作品与争鳴」誌上に於いて展開されたということである．この作品の引き起こした紛争，すなわち梁暁声の蕭立軍に対する非難や，作家協会首脳部の蕭立軍への処分などの経緯に関しては，「文学報」が'88年6月16日に記事を掲載し，その後7月21日に鮑昌による一文を筆者自身の要求に従い掲載したのみで，「文芸報」をはじめ，それ以外の殆どの有力な文芸関係の新聞，雑誌は全く報道していない．

また，蕭立軍に対する処分が決定した後にようやく開始された，作品そのものの評価をめぐる論争に関しても，肯定論，否定論を問わず，その殆どが「作品与争鳴」誌上に集中しており，その他の殆どの新聞，雑誌は全く沈黙を保ったままであった(20)．

このことを作品自体が作家協会首脳部によって，単なる個人攻撃として処理され，なおかつ発表後一ヶ月しか経過しておらず，作品自体の評価をめぐる論争も行われていない段階で，作者に対し異例の厳しい政治的処分が下されたことと合わせて考えるならば，この作品に対しては，できるだけ公けにせず，内部で，しかも迅速かつ厳重に処理してしまおうという，作家協会の組織としての意向が働いていたものと思われる．

（4）

結局，蕭立軍が『無冕皇帝』を執筆した動機はどこにあったのであろうか．「雪城」の原稿の争奪戦に敗れた蕭立軍の，梁暁声に対する個人的な憤りが大きな原因となったことは否めないであろう．

作品の主人公である廖達天は，雑誌「文学研究」の編集に携っていた際，編集長の劉若愚に見い出され，後に劉若愚とともに雑誌「中国文学家」の編集部に移っているが(21)，これは，雑誌「文芸研究」の編集者時代に，編集長の馮牧に見い出され，後に馮牧ととも

に雑誌「中国作家」の編集部に移った蕭立軍自身の経歴とほぼ一致する．また，「文学研究」と「文芸研究」，「中国文学家」と「中国作家」というように，作中の架空の雑誌名と，実在の雑誌名との間にも明らかな類似性を見い出すことができる．

一方，もう一人の重要な作中人物である于大童に関しても，梁暁声との間に次のような類似点を指摘することが出来る．まず第一に，于大童は，辺境地区の無名の雑誌に発表した短篇小説が，'82年度の全国短篇小説評選に入選し，それを契機に作家として注目を浴びるようになるが，これが，中国最北端の言わば「辺境地区」(22)である黒龍江省の文学雑誌「北方文学」に発表した短篇小説『這是一片神奇的土地』が，'82年度全国短篇小説評選に入選し，有望な青年作家として注目されるようになったという，梁暁声自身の経歴とほぼ一致していることである．

そして，第二に，廖達天と于大童とは，古い友人であるにも関わらず，廖達天は于大童の作品『北国風』の争奪に敗れるが，これが蕭立軍が古い友人である梁暁声の作品『雪城』の争奪戦に敗れるという現実の経緯と一致することである．

以上のように，蕭立軍が，作中人物である廖達天，于大童をそれぞれ蕭立軍自身と梁暁声を指していることが容易に推測できるような形で描いていることからも，『無冕皇帝』によって，梁暁声に対する個人的な憤りを表わそうという作者・蕭立軍の意図を明らかに見てとることができよう．仮に，蕭立軍に全くそのような意図がなかったとするならば，少なくとも作中人物をこれほど露骨に実在の人物に結びつける形では描かなかった筈である．しかしながら，その反面，第3章で言及したように，'88年6月4日の蕭立軍を非難する記者会見の席上では，蕭立軍を批判する立場に立った鮑昌さえも，『無冕皇帝』にはある程度真実をついた部分が存在することを認めている．また，梁暁声をはじめとする作中人物のモデルとされる人物たちが，作品に対して素早く，激しい反応を示したこと自体も，この作品の持つ一定の真実性を証明しているとも言えよう．

作品の中に描かれた原稿の激しい争奪戦や，「利」のためには，「義」や「法」さえも無視してしまう一部の作家の堕落といった問題が，現実に文学界に存在していることは，第2章で見て来たように明らかな事実である．そしてまた，このような拝金主義，道徳観念，法観念の欠如などの問題に対する批判が，文学界以外を舞台とした文学作品によって既に数多く行なわれていたにも関わらず，この『無冕皇帝』が出現するまでは，文学界自体にも同様の問題が存在すること，換言すれば，文学界も決して「聖域」などでは有り得ないことを指摘した文学作品が存在しなかったのも確かである．

作者の執筆の動機がどこにあるにせよ，結果的にこの作品は，小説という具体的な形で文学界内部に現実に存在する問題を初めて文学界以外の，一般の読者の前に提示した．少なくともその意味では，梁暁声への憤りからフィクションともノンフィクションともつかない中途半端な形で発表したのは，蕭立軍自身に非があるとは言え，この作品は意義のあるものとして認められるべきであり，決して単なる個人攻撃として処理されるべきものではないであろう．

更に言えば，この作品の出現，及びそれに対する文学界の反応は，現在の中国の文学が抱えている次のような二つの問題を明らかにしたということも出来よう．

第一の問題は，85年以降創作の自由が最大限に保証され，文学にとって新中国建国以来かつてない程の恵まれた情況がもたらされたにも関わらず，文学自体にその情況に十分に

対応できるだけの力が備わっていなかったこと．そして，そのために創作の自由ということが，王蒙の言うような「黄金時代の到来」にただちにはつながっていないということである．

中国に於いては，従来政治と文学の間には常に緊張関係，すなわち政治が文学に対して一定の枠を設定し，そこから逸脱する者に対しては政治的制裁を加えるという形での干渉が存在していた．'85年以降，少なくとも'89年6月の所謂「天安門事件」の前までは，このような緊張関係が言わば最大限に緩和された時期であった．

これは，逆に言えば，政治による保護もないということであり，文学は文学として主体的に社会と関わっていかなければならないことを意味する．また，創作の自由の保証ということと，ほぼ時を同じくして出現した，出版社がまず第一に経済効益を考慮しなければならないという従来にはなかった情況に対しても，文学はやはり主体的に対応していくことを要求された．

しかし，結果的には'85年当初こそ文学は活況を呈し，極めて短期間の「黄金時代」を出現させたものの，その後は，文学作品の質や社会への影響力の低下という問題に直面することとなり，甚しくは，文学関係の出版物のうちかなりの部分を色情小説などによって占拠されてしまうという情況に至ってしまった．

更には，このことが『無冕皇帝』が暴露したような，契約や道義を根底から無視した出版社間の激しい作品の奪い合いや，「利」のみを追求し，そのためには手段を選ばぬ一部の作家の堕落をも生み出すことになった．

その根本的な原因は，やはり文学が長期間に渉って政治に従属する存在であったが故に，そこから実際に解放された時，その新しい情況に主体的に対応していくだけの力が備わっていなかったところにあると言えよう．そして，この『無冕皇帝』という作品の出現は，王蒙の言葉に象徴されるような，創作の自由が保証されたことをそのまま文学の黄金時代の到来としてとらえる考え方が，些か楽観的に過ぎたことを証明したということも出来よう．

第二の問題は，政治の側からの干渉が基本的に解消されたにも関わらず，文学界自体が時として正に個々の作家に対して，従来の政治の側と同じ立場に立ってしまう可能性を持っていること，換言すれば，文学界自体が創作の自由を制限する要素となる可能性を持っていることである．

『無冕皇帝』の作者蕭立軍に対し，中国作家協会は，公開の場での反論の機会も与えぬまま，極めて短期間のうちに政治的処分を下してしまった．そして，そのことに対し，殆どの有力な文芸関係の新聞，雑誌は終始沈黙を保ったままであった．

現在，中国の作家は，創作活動を本業とし，原稿料及び作家協会から支給される給与を主な収入源とする「専業作家」は勿論，本業の傍らに創作活動を行なう「業余作家」，すなわちアマチュアの作家についても，そのかなりの部分が中国作家協会という組織の会員として，その機構の中に組みこまれている．

従って，ごく一部の例外(23)を除けば，作家協会会員であることが，すなわち中国に於いて作家として公認され，創作活動を行なっていくための必要条件となっている．

換言すれば，中国の作家は，「作家」である以上，「作家」という「個人」であると同時に，必然的に「作家協会会員」という「組織の一員」であることを要求されるのである．

従って，このような体制の下では，作家が完全に独立した存在として，全て自己の判断，自己の責任において発言し，行動するということが困難になってくる．たとえ，政治の側からの干渉がなくなり，創作の自由が保証されたとしても，作家の「組織の一員」としての立場が，「個人」としての立場で行なう創作活動に対して，一定の制限を加える可能性が出て来るのである．

作家という「個人」の立場で『無冕皇帝』を執筆し，はじめて文学界自体に批判の矛先を向けた蕭立軍に対し，作家協会が「組織の一員」に対する制裁措置として，厳しい政治的処分を加えたことは，正に現在の中国の作家が抱える「個人」としての立場と，「組織の一員」としての立場との矛盾という問題の存在を明らかにしたものと言うことが出来よう．

以上に述べて来たように，現在の中国の文学が抱える二つの大きな問題の存在を明らかにしたという意味では，『無冕皇帝』の出現，及びそれによって文学界内部に引き起こされた紛争は，意義のあるものだったと言えるのではないだろうか．

（注）

(1)　「中国当代期刊総覧」（黒竜江人民出版社'87年11月出版）によれば，雑誌「電視・電影・文学」は，'81年5月に「萌芽」の増刊号として，季刊の形で創刊され，'85年1月に現在の名称に改められ，隔月刊として，「電視・電影・文学」雑誌社から発行されるようになった．内容は，小説の他に，映画・テレビのシナリオ，映画・テレビ番組の紹介や批評などとなっている．発行部数は，7万9千部あまりで，これは，中国全土を発行対象とする有力な文芸雑誌「人民文学」（中国作家協会聯合出版部）の20万部，「当代」（人民文学出版社）の27万部，「収穫」（「収穫」文学雑誌社）の18万4千部などと比較するとかなり少なく，ここからもこの雑誌が主に上海地区のみを発行対象とした，あまり有力とは言えない雑誌であることが見てとれよう．

(2)　以下，蕭立軍の経歴については，主に花敏「中国文壇1988年頭号新聞掲秘録」（「大特区」創刊号，'88年），及び蕭立軍の南開大学中文系在学時の指導教官であった張学正副教授の教示による．

(3)　梁暁声（1949－　）黒竜江省ハルピン市生まれ．'77年復旦大学中文系卒業，北京映画製作所へ配属され，シナリオ執筆を担当する．'82年「北方文学」第8期に発表した短篇小説『這是一片神奇的土地』が，同年度の全国短篇小説評選に入選し，それを契機に若手の有望作家として注目されるようになる．代表作としては他に『今夜有暴風雪』（「青春」'83年第1期），『父親』（「人民文学」'84年第11期），『雪城』（「十月」'86年第2期，第3期）などがある．（潔民・主編「当代中国作家百人伝」－求実出版社'89年6月出版，及び余樹森，牛運清・主編「中国当代文学作品辞典」－北京大学出版社'90年12月出版，による）

(4)　蕭立軍『無冕皇帝』題記　「作品与争鳴」'88年第8期，p18

(5)　胡啓立「在中国作家協会第四次会員代表大会上的祝詞」「文芸報」'85年第2期

(6)　王蒙「社会主義文学的黄金時代到来了」－中国作家協会第四次会員代表大会閉幕詞」「文芸報」'85年第2期

(7)　「専心致志　発展創作」「文芸報」'88年１月９日
(8)　周彦文「対瘋狂的引導－中国出版業的経済観照」中国経済出版社'91年８月出版，p47.
(9)　董楽山「色情与国情」「文芸報」'88年６月18日
(10)　趙家壁「出書真難」「文学報」'88年１月７日
(11)　建国，英子「危機！紙価飛漲的衝撃波－文化書刊出版発行調査之一」「文芸報」'88年３月26日
(12)　谷泥「作家与編輯的『関係学』」「文学報」'88年６月23日
(13)　以下，『無冕皇帝』をめぐる紛争の経過については，主に花敏「中国文壇一九八八年頭号新聞掲秘録」（前掲注２）の記述による．
(14)　鮑昌「従紀実小説『無冕皇帝』談開去」「文学報」'88年７月21日
(15)　文熙佳「被褻瀆的自由女神－評『無冕皇帝』」「作品与争鳴」'88年第８期
(16)　肖易「読『無冕皇帝』並致『作品与争鳴』」編輯部　「作品与争鳴」'88年第８期
(17)　譚循「没有答案的思索」「作品与争鳴」'88年第９期
(18)　原載・「鐘山」'90年第１期
(19)　南開大学中文系張学正副教授（前掲注２）の教示による．
(20)　『無冕皇帝』をめぐる紛争に関する報道記事，及び作品自体に対する評論文のうち，筆者所見の11篇を掲載新聞，雑誌別に分けると，以下の通りとなる．

「作品与争鳴」	6
「文学報」	2
「電視・電影・文学」	1
「書刊導報」	1
「大特区」	1

(21)　『無冕皇帝』第１章　「作品与争鳴」'88年第８期，p18-19.
(22)　『無冕皇帝』第１章　「作品与争鳴」'88年第８期，p22.
(23)　'88年以降，北京などを中心に，創作活動を本業とするものの，作家協会に加入せず，原稿料を主な収入源とする「創作個体戸」と称される真の意味でのプロの作家が出現しているが，まだ少数である．